

血液透析患者における脳血管障害罹患後の 外来通院に影響する背景調査—KDQOL-SF™による評価

長崎腎病院

○岩本まゆみ 林田征俊 白濱美和 山中真樹子 丸山祐子 原田孝司
船越 哲

【背景】

維持透析患者は、一旦脳血管障害を発症して入院すると、在宅への復帰が困難と考えられる。

【目的】

外来通院可能となった脳血管障害血液透析患者の背景因子を調査する。

【対象と方法】

2012年12月1日に在籍している外来血液透析患者264名のうち、有効回答を得られた脳卒中による入院を経験した49名(以後、既往者)および非既往者50名を対象として、KDQOL-SFを用い比較及び、支援状況を調査した。

【結果】

脳卒中既往者のKDQOL-SFは非既往者と比較し腎疾患特異的尺度、包括的尺度で高く、介護保険利用可能者でも既往者が高い傾向がみられた。

有意差はなかったが、他の項目と違い「身体機能」において既往群の方で低い傾向がみられた。

既往群において介護保険を申請はしたものの「非該当」で患者が希望する支援を受けられないケースも多かった。

【考察】

脳卒中後の透析患者が外来通院を継続する為には、ADLを維持することが必須であり、患者を中心とした介護と家族の連携、及び、調整役として医療機関が十分に機能する必要があると考えられる。